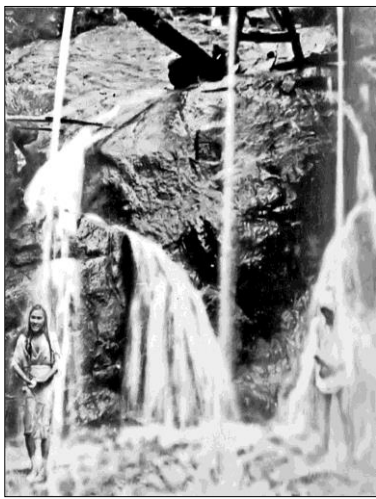




筑波山白滝

昭和30年代後半(上)
大正期(右)



A c a n t h u s

(土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語)



進修同窓会 HP にアクセス

第167号

2023(令和5)年5月23日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

筑波紀行 1

土浦中学では、開校2年目の1898〔明治31〕年に修学旅行(春期・秋期)が初めて実施され、翌年の春期のそれでは、1・2年生は筑波山に挑みました。その旅行記を2年生山口鼎太郎(中2回)は、「筑波紀行」として残しています。

なお、引用文中の旧字体は新字体に改めました。「筑波紀行」の見出し及び句読点は、筆者によるものです。また、【 】は筆者による注記です。

春期修学旅行

1900 〔明治33〕年9月発行の『進修第2号』(『雑報』)によれば、1899 〔明治32、十千十二支(六十千支)では己亥(つちのとい)〕年の春期修学旅行は、次の行程で実施されました。(…徒歩 〓 鉄道)

〇1年生(中3回)・2年生(中2回)
5月25日

本校(新治郡役所)…真鍋…藤沢…藤房公遺跡…高岡…法雲寺…小田…北条(昼食)…白井…白滝…男女川…御幸ヶ原…男体山…女体山…弁慶七戻り…筑波
〔3年生が合流〕 (泊)大越楼

5月26日

大越楼…君島…大曾根…一の矢…八坂神社…本校

〇3年生(中1回)
5月24日

本校…恋瀬川…石岡…国分寺跡…岩間…佐白山…笠間 (泊)井筒楼

5月25日

井筒楼…笠間駅…岩瀬駅…雨引山…加波山…葦穂山(足尾山の古名)…筑波

〔1・2年生に合流〕 (泊)
5月26日

1・2年生と同行程

「筑波紀行」ニ乙 山口鼎太郎

一 旅行前夜

「夫レ、智者ハ水ヲ好ミ、仁者ハ山ヲ好ム。ト。余ヤ、浅学短才ノ一寒生【かんなせい 貧しい学生・生徒。また、自分の謙称】ト雖モ、亦峻嶺【しゅんれい 険しく高い峰】碧水【へきすい 濃い青色に澄んだ水】ヲ跋涉【ばつしょう 山を踏み越え、川

を渡ること】シ、白雲二攀【よ 登攀】ヂ、明月二棹【さおさ】シ、清風ニ高吟スルヲ以テ、無上ノ快樂トナス。翠岳【すい がく みどりの険しい山】ハ寝々【がが 山や巖などの険しく聳え立つさま】トシテ志氣【しき 物事をなそうとする意気込み】ヲ高フ【高ウ】シ、滄海【そうかい 青海原。大海】ハ洋々トシテ文才ヲ養フ。嗚呼今日今頃ノ春霞、余、例ノ烟霞ノ癖【えんかのへき 深く山水を愛して執着し、旅を好む習癖。烟霞の痼疾】起コリ、筑峯ニ旅寝スルヲ夢見、花ヨクト立チモウク【憂ク】、座スルモツラク【辛ク】ナリツレ【ヌレ】ド、塵務【じんむ 俗界の煩雑な事務】忙【せ】ハシキ学海ノ一漁夫、未ダ好機会ヲ得ズ。常ニ以テ遺憾トナス。折コソヨケレ己亥年皐月【さつき 陰暦5月の異称】、巍峩【ぎが 山などが高く聳えるさま】タル筑峯ノ南、激澗【れん えん 水の満ち溢れるさま】タル霞湖【霞ヶ浦】ノ西ナル我校ハ、今ヤ駘蕩【たいとう のどかなさま】タル春風ニ誘ハレテ、其処ニ足ヲ運バントス。欣喜【きんき 大喜びすること。欣喜雀躍】何ゾ之ニ加ヘン。此夜満腔【まんこう 満身】ノ喜ヲ堪【た】状態を保ち続ける。もちこたえる【ヘテ床ニ入りヌ。】

御智者ハ水ヲ好ミ、仁者ハ山ヲ好ム
出典は、『論語』「雍也第六23」。

「子、曰わく、知者は水を樂しむ、仁者は山を樂しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は樂しみ、仁者は寿いのちながし。」と

二 筑波へ

「廿五日夙ニ【つとに 朝早く】起キテ、柴戸ヲ開ケバ、日頃ノ微雨新ニ霽レ【は

れ 晴れ】テ、春光麗【うらら】カニ、庭前ノ樹木ナホタベ【昨夜】ノ雪ヲ葉末ニ珠造リ、一陣ノ東風徐【おもむ】ロニ来テ紅顔ヲ払フ。己ニシテ倉皇【そうこう 急ぐさま】旅装ヲ調ヘ、七寸ノ草鞋脚絆、イデヤ二日ノ清遊。能ク千里ノ春風ヲ蹂躪【じゅうりん 踏み付けること】シクレンモノト、想ハ既ニ【筑】波山ニ馳ス。乃チ登校スレバ、衆生【しゅうせい 多くの人々。ここでは、生徒】己ニ会シ、一痕【いつこん 一つの形を留めているもの。月などに言う】ノ淡月ナホ西山ニアリ。嚟【りゅうりよう 楽器の音などが冴え渡っているさま】タル喇叭【ラッパ】ノ一声ト共ニ、隊伍整然歩調肅々【しゆくしゆく 厳かなさま】、校門ヲ出デ、道ヲ陸前浜街道ニ取リテ、西折シ【行ク】こと【準仮名】里許【ばかり】ニシテ小祠【祠】の誤リ【アリ。万里小路藤原藤房【までのこうじふじわらふじふさ】公ヲ祀レル所タリ。即チ祠前二蹲【うすくま】リ、一拝ス。時ニ当年【ノ】【その頃の 当時の】公ノ事ヲ懷ヘバ、誰カ熱涙ノ袖ニ迸【ほとばし】ル無カランヤ。今ヲ思ヒ昔ヲ忍ンデハ、万感尽【ことごと】ク胸裡ニ集マリ、頭ヲ擡【もた】ゲテ沈思瞑目セバ、公ガ尊影髣髴【ほうふつ ありありと思ひ浮かぶさま】トシテ眼底ニアリ、懷古ノ情禁ズル能ハズ。



万里小路藤原藤房公遺跡「髪塔塚」(土浦市藤沢)
藤原卿の髪を埋めて築いたとされる塚

漸ク腰ヲ上ゲ、恭シク再拝シテ辞ス。之ヨリ道ハ田圃ノ経【徑 小道】間ヲ伝ヒ、若草ヲ草鞋ニ踏ミシダキツ、戯言【ざれごと】蜂蝶ニ随ヒテ進ミ行ク一行ノ身快云フベカラズ。歩々行クテノ方ヲ見渡セバ、筑峯巍然【ぎぜん 高くそばだつさま】トシテ天外ニ聳エ、秀麗【秀麗】の誤リ】ノ氣崇高ノ想ヲ現ハシ、呼ベバ將ニ答ヘントスルノ状、恰【あたか】モ吾等一行ヲ迎フルガ如シ。歩ヲ北ニ転ジテ顧ミレバ、天全ク明ケテ一条ノ紅暈【こうとん】「暈」は、日の出のさま。転じて、朝日【ハ早クモ前途ノ山頭ヲナデ、木ノ間ガクレノ人家ヨリ、炊煙ノ上ルモ長閑【のどか】ナリ。曉風【ぎようふう】明け方に吹く風】一陣時ニ襲ヒ来レバ、万頃【ばんけい】（頃）は、中国の地積の單位土地の広いさま】ノ麦浪ハ忽チ熟睡ノ中ヨリ狼狽【ろうばい】シテ、金波層々遠ク疊ミ【たたみ 繰り返すこと】去リ疊ミ来リテ、足ヲ撲ツ【う撃つ】白露ハ雨ヨリモ繁シ。サテモ爽快極リナキ朝ボラ【朝ボラケ】カナ。茶圃ハ青々トシテ、陽炎【かげろう】頻リニ登リ、路傍ノ楊柳【よりりゆう】（楊）はカワヤナギ、「柳」はシダレヤナギ】長ク糸ヲ清流ニ垂レ、葉上ニハ薄黒キ塵ヲ積ミ、来ムタ立ヲ待ツモノ、如シ。緩歩【かんぼ ゆつくり歩くこと】談歩足ニ任セテ行ケバ、漠々【ばくばく 広大なさま】タル錦繡【きんしゅう】ノ間、幼トナク老トナク皆熙々【きき】「熙」は、喜び笑う】雍々【ようよう 和らいださま】トシテ、豊熟ノ歌ヲ奏スルハ、亦是照代【しょうだい】「昭代」の誤り昭代は、よく治まっている世。太平の世】ノ恩沢ニ浴スルモノ、太平ノ風ハ靄然【あいぜん 穏やかなさま】トシテ村里ヲ繞

ぐルヲ見ル。進ミテ奈【松】林ヲ越エ、村落ヲ過ギ、田圃【道】ヲ辿【たど】ル。田ノ面ヲ弘ヒテ来ル曉風除々トシテ、早苗ノ葉末ニ一夜ノ宿ヲ求メシ白露ヲ墜セバ、心地イトスガくシ。軒端ヲ翔【とび】テ君ガ代ヲ寿【ことほ】グ村雀、暑サヲ呼ブ蟬ノ声、歌フ【歌ヒ】テ流ル、小川、心アルモ情ナキモ何レ目出タカラヌハアラズ。嗚呼田舎ハ神之ヲ造リ、都ハ人之ヲ造ルト云ヒケンくーぱー【(註5)】ノ言、実ニ偽リニアラザルナリ。已ニシテ小田治久【(註6)】ノ旧跡ナル小田ヲ過ギ、北条ニ至リテ昼餐ヲ喫ス。一椀ノ握飯、三杯ノ洪茶、実ニ山海ノ珍味モ啻【ただ】ナラズ。」

(註2) 陸前浜街道

現在の国道6号に相当する街道のうち、東京都荒川区から宮城県岩沼市までの区間に1872「明治5」年に付けられた名称。「陸前」は、街道の終点となる岩沼が、かつての「陸前国」に属することに由来する。現在では、国道6号の別名として用いられている。江戸時代、水戸藩では、水戸以北を磐城街道または岩城相馬街道、水戸以南を水戸街道と呼んでいた。土浦では、銭亀橋を渡り、市内を曲折し、真鍋宿から一高前を通り、中貫宿へ抜けていた。

(註3) 西折シ

土浦市内から、土浦一高旧正門前の丁字路を筑波方面に西折して、筑波山に向かった。現在の歩道橋西側に「真鍋の道標」が立っていた(のちに、「土浦市立博物館」に移設された)。

道標の建立は1732「享保17」年で、「右 ぶちう 水戸道」(府中、現在の石岡市)「左 きよたき つくば道」(清滝、土浦市大字小野の坂東26番札所清滝観音)とある。



真鍋の道標

最上部は勢至菩薩を標示する梵字「さく」。つくばの「つ」は「徒」の崩し書き。

(註4) 万里小路藤原藤房公

1295「永仁3」年く？ 鎌倉く南北朝時代の公卿。後醍醐天皇の側近。元弘の乱により、天皇とともに笠置山に逃れたが、幕府に捕らえられて常陸に流され、小田治久の藤沢城に籠居した。建武の新政で復帰したが、新政に失望し、1334「建武元」年に出家、消息を絶った。時に正二位、中納言。

(註5) くーぱー

ウィリアム・クーパー(1731く1800)。イギリスのロマン主義の先駆的な詩人。

(註6) 小田治久

小田治久(おだはるひさ 1283く1352)は、つくば市小田の小田城を本拠とした小田氏の第8代当主。1327「嘉暦2」年、鎌倉幕府の命を受け、陸奥安東氏の乱を平定したが、幕府が滅亡すると、万里小路藤房を伴って上洛し、建武政府に従った。1338「延元3・暦応元」年には北畠親房を小田城に迎え、関東の南軍の中心として戦ったが、1341「興国2・暦応4」年に降服。以後、足利方に属し南軍と戦った。

三 白滝

「辿リ辿リテ、身ハ図ラズモ山麓ニゾ着キヌ【ヌル】。之ヨリ山ヲ繞リ、溪ヲ涉レバ、澗【かん 谷】径尽クル所ニ飛泉アリ。白滝【白】ト云フ。先ツ御山【筑波山】ニ詣ヅル人々ハ、心ノ塵ヲ払ハント此ノ瀑壺【ばくこ 滝壺】ニ清ム。我

一行洗ヒ終リ、聽【やがて】側の岩石ニ腰打チ掛ケテ憩フヲ暫時。鞆々【とうとう】「鞆」は、鼓の音】トシテ林間ニ響キ、殷々【いんいん 音声の大きく轟くさま】トシテ恰モ雷声ノ如シ。人ヲシテ毛髪ヲ震悚【しんしやう 震え上がって恐れること】セシム。落下数十丈、恰モ素練【それん 白い練絹(ねりぎぬ)】ノ垂ル、ガ如ク、飛沫奔散霧生ジ、流レテ岩ニ激シ、石ニ怒ツテハ、淵トナリ、瀬トナリ、泡沫トナリ、奇石怪岩ノ点在セル等、異態万状【ばんじやう いろいろのありさま】一一【いちいち】名状スベカラズ。身ハ飄然【ひょうぜん 留まらないで漂うさま】トシテ、塵外【じんがい 世俗を離れた所】ノ想アリ。」

(註7) 白滝

記紀・万葉の時代から神々の在す山であった筑波山は、徳一大師が延暦年間(782く806)に、中禅寺を開いて後、神仏習合が進み、山全体が修験霊場となっていた。山中にある多くの岩窟や滝では修験の修行が行われ、白滝もその一つで、修験道の行者(ぎようじや修行者)が、滝に打たれて修行をする滝行の場であった。

1602「慶長7」年、筑波山が江戸城の鬼門(東北)に当たるところから、徳川家康が、中禅寺を徳川將軍家の祈願所と定めると、筑波山は、神仏習合の霊山、板東三十三観音第二十五番札所として栄え、中禅寺は、大御堂を中心として、日輪院・月輪院・東光院など18ヶ坊、300の僧侶を数えたと言う。

しかし、明治新政府の神仏分離令による廃仏毀釈は、中禅寺に致命的な打撃を与え、壮麗を誇った大御堂・三重塔などの多くの堂塔は破壊され、仏像・仏具もその大半が破壊された。

白滝には、戦前までは、かなりの水量があり、近在の人の行楽地となっていたが、1965「昭和40」年の筑波スカイラインの開通と翌1966年の土石流とにより、水量はかなり減っている。